

Goods Talk

-芸術・クラフト・オミヤゲの脳内シャッフル
美術・文学・観光・人類学のチャンプルー-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2017-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 和恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18812

「Goods Talk：芸術・クラフト・オミヤゲの脳内シャッフル 美術・文学・観光・人類学のチャンプルー」

中村 和恵

二〇一六年五月三十一日、「Goods Talk: 芸術・クラフト・オミヤゲの脳内シャッフル／美術・文学・観光・人類学のチャンプルー」と題して行ったお話は、モノを蒐集する・展示する・意味づける行為とはなんだろう、という一見素朴で、じつはどこまでも拡大可能な問いを、聴衆の関心の方向に合わせて自在に語る試みの一環だ。これまでも講演「オーストラリア先住民から学ぶ「知る」ことの意味」（二〇一四年二月一八日、スルガ銀行 (Sulabo) やエッセイ「生きている展示（『考える人』新潮社二〇一三年一月号）等で美術館、博物館、そして

先住民美術と観光産業に関する考えを進めてきた。今回テントという空間でなにかを展示して話すことを提案されたとき、コレクターとしての自分を提示してみたらどのような反応が返ってくるだろう？ と思いついたのだ。

用意したのは以下のようなモノとストーリー。

一、コンセプトチュアル・アーティスト岡本光博による「赤毛袋」と「すはま」。有名なアメリカの子供向け番組やアニメのキャラクターの人形を「リサイクル」つまり人形の頭を切り、詰め綿を抜いて逆さにして口金とチ

エーンをつけバッグにしたもの。「リサイクルはコピーライトを殺すのか？」というシリーズの作品である。人がモノを集めるということは、モノに付与された価値を集めるということにはかならず、その価値は読解のコンテストによりいかようにも揺らぎうる、ということを実いとともを示すものだ。

二、Shorty Jangala Robertson (Warlukurlangu) の絵画をもとにしたおみやげ。傘、絵画そのもの、ほか。他のアボリジナル・アーティストたちの作品とその意味、創作現場の写真、現地でとれる豆や種でつくられたネックレス等も紹介。おみやげと芸術と工芸に、本質的な差異はない。消費者の意味づけが異なっているだけなのだ。ただ作品に優劣は存在するとわたしは確信している。おみやげは優劣を問わない消費方法を促す一方で、ときに作家の墮落も促す。

三、アイヌ木彫り作家によるおみやげ。鹿角のネックレス、木彫りの可動部分を含むペンダントヘッドほか。アイヌ工芸もまた近代化と観光産業の關係について多くの興味深い事例を示してくれる。一部の彫刻家はまさに芸術家として高く評価されてきた。一度廃れたおみやげ品となったクマ木彫りをいま見直す動きが博物館展示や

出版活動に見られる。

四、ラトビア出身のジュエリー・デザイナー Gunis Landers による指輪やブローチ等のアクセサリ。アンモナイト・琥珀・マンモスの牙などシベリアからバルト海にかけての素材を多用して、不思議な空想上の生物や非日常的なデザインをモチーフとする作品をつくりあげるジュエリー作家から感じられるのは、ソビエト連邦時代、資本主義経済圏の高度に利益追求型のデザイン市場から隔離されてしまっていたことが、ジュエリー・デザインという非政治的な創作の現場に逆説的に確保した、自由な創造である。

五、アフリカン・プリントのワンピースやスカート。主に東アフリカで販売されるカンガや西く中央アフリカの多様なプリントを素材に、ドレスやスカートをづくり日本で販売する事業を立ち上げた梅田洋品店主宰の梅田昌恵さんに会場においていただき、作品の展示と説明にご協力いただいた。卵やひよこや胎児が所せましとリプリントされる「子産み柄」やスワヒリ語のことわざがプリントされた布地をアフリカ各地に毎年行って買いつけてくる梅田さんは、これらのユニークで独創的な柄が、じつはインドネシアのオランダ植民地でオランダ人商人

が現地の布を主力商品のひとつとして扱ったことに由来することを明かしてくれた。商人たちは大柄な西ノ中央アフリカの女性たちが大量の布を用いて衣服を仕立てることを知り、かれらに受けそうな柄をつくって販売することによって利益を上げることをおもいついたのだ。アフリカン・プリントとして知られるカラフルで奇抜なプリント布は、植民地支配の歴史とヨーロッパのアフリカ解釈、中国や日本の工場など、グローバルな価値世界と経済活動の交流から生まれているのである。

その他、南太平洋のサモアやフィジーの木製工芸品や日本人彫刻家の作品なども展示し、主に一、から五、についてざっと説明したあと質疑応答でさまざまな問題に触れようと考えた。しかし質問が先住民の生活に多く集中したこと、また質問をすることに消極的な人が多かったことから、この方法はあまりうまくいかなかった。設営された会場がパイプ椅子が講演者に向かって何列か並べられた、「拝聴」型の場所だったことも影響したかとおもう。これを円座にしてビニールシートを敷き、みんなに座って勝手にモノを手にとってもらったら、まったく違った場所になったのではないだろうか。機会があれば次回は円座を試みてみたいとおもった。